

---

# 道

佐野秀介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
道

【Nコード】  
N7143V

【作者名】  
佐野秀介

【あらすじ】  
ブログから転載しました。

日常にある小さな幸せを書きました

学校の帰り道、毎日私は至上の喜びを手に入れる。

その声との出会いは三か月前にさかのぼる。放課後、担任に呼び出され成績不振を注意された私は、むしろくしゃした気分になり何気なくいつもとは違った道を帰ることにしたのだ。

タバコ屋の角を曲がらずに大通りに対して並行して走っている旧道にはいった。

一本道を変えるだけでこうも印象が変わるのか、私はひとりごちて歩みを進めた。数年間住んできた街ではあったがその道を通るのは、初めての経験だった。

東京のベッドタウンとして造られたこの街は、娯楽施設などはまるでない。親の転勤でこの地にやってきたが、前の自宅のほうがよくよかった。

この街には人間味が感じられない。近所付き合い、そもそも隣人の顔さえ知らない。私はそんなこの街が嫌いだった。

幹線道路から離れた住宅街にあるその道はまるで存在を知られることを厭うような暗い印象を与えるくねくねと複雑に曲がる細い道だった。日が傾きかかり、家々の塀に両端を囲まれているせいもあるのかもしれない。

しかし、私はその道で最高の歌をきくことになる。六月も初めだったが、そこは日が入らないので少し肌寒い。

曲がりくねった道は数分も歩くと後ろにも前にも塀しかみえない。所々灯りのともった家もあるが、大多数はまだ暗いままだった。

しばらく歩いたところで、かすかに人の声が聞こえた。近づくにつれてそれが女性の歌声だということがわかった。耳を澄まし辺りを見回してみるが、目線より高い塀に覆われているのでそれがどの家から流れてくる声なのかはわからない。

繊細で優しい、それでいてどこか寂しげな声色。学校であった些細なことなど忘れさせ、その声だけに聴き入らせてくれる歌声だった。どれくらいの時間私はその場に立ち尽くしていただろうか？ はじめてその歌声を聴いた日、私はその場に立ち止まり歌声が消えるまでしばらくその場所を離れることができなかった。

それからはその道が私の帰り道になった。いやなことがあった時、悲しいことがあった時、怒りが心を満たした時。その歌を聴くと不思議と心が晴れ、心がすべて洗われた。

初めは歌声がどの家から流れてくるのか気になっていたが、日が経つとそんなことはもうどうでもよかった。そこには私の喜びがあり、安らぎがあった。

今日も私はその道に差し掛かる、かすかに歌声が聞こえる。嫌いだった街に少しだけ好きな場所ができた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7143v/>

---

道

2011年10月7日09時43分発行